日本民藝館研修終了報告

2019 年 8 月 7 日（水）於：日本民藝館

第一支部運営委員

8 月 7 日（水）13:30-1615、京王井の頭線「駒場東大前」駅から徒歩 7 分の閑静な住宅街にある日本民藝館において表記研修が実施されました。連日の猛暑等により当日数名の方が参加できなくなりましたが、会員 10 名、非会員 4 名、委員 2 名の合計 16 名が参加し、関東地区のみならず愛知県からも駆けつけて頂きました。

前半は本館の向い側にある、民藝運動の主唱者である柳宗悦の自宅であった石屋根の立派な長屋門（栃木県から移築した 1880 年築の門）と母屋からなる西館において、当館の学芸部長の杉山享司氏による「柳宗悦と民藝について」の講義が行われ、後半は西館内部と本館展示を視察しました。

柳宗悦は 1910 年に武者小路実篤や志賀直哉が中心となった文芸誌「白樺」の創刊に参加し、個性の尊重や自由主義を理念にルノアール、ゴッホ、セザンヌ、ロダンなどの西洋近代美術を紹介。その後、朝鮮陶磁器の美しさに感激し、「西洋の美術」から「東洋の工芸」へ関心が移り、1924 年に山梨県甲府で偶然発見した木喰仏との出会いを契機に「極めて地方的な郷土的な民間的なもの、自然の中から湧き上がる作為なき製品に、真の美があり、法則がある」との確信を深めていった。そして、それまで下手物（ゲテモノ）と呼ばれていた無名の職人達が作った民衆的工芸品を 1925 年に「民藝」と名付け、民藝品の美的価値を紹介する為に美術館設立運動を始め、1936 年に日本民藝館が創設され、初代館長となり、美は暮らしに寄り添うものでなければならないと、「美の生活化」を目指す民藝運動を展開していった。

又、「直観の力」を大切にし、知識や理論に頼らず、自らの眼と心の働きに任せることが何よりも肝要だと説いた。

日本民藝館の展示方法もそれに従い、一般的な美術館で多く採用されている歴史的・時系列的な展示等ではなく、「物のもつ美しさを主眼として並べ」、展示品の説明も最小限に抑えられ、知識で物を見るのではなく、直観の力で見ることが何よりも肝要であるという柳の見識によっている。

今後、多くの外国のお客様にも是非、日本の民藝品を自分の眼で見て頂き、その素晴らしさをお伝えできればと願います。